



第2回 絵双六に魅せられて

初春 書始寿語六

1890 (明治23)年



上がり (上) 赤色と藍色に取られた繁華の遊者が花魁と情に陥した役者の脱みをかきしています。桃紅色の衣袋が冴えています。



袋 籠 (左) 双六を入れる袋にも新春の春気に溢れています。松竹梅を背景に役者の羽子板と影絵を大切に描く春風草子の絵。物受けな視線が気になります。

文・監修 吉田 修
よした・おさむ 1954年生まれ、鳥取県松江市出身。全国空人情報協会常務理事、NPOキャリア推進ネットワーク広報部長、和文に数寄屋学会会長を務めた。つらら、築地双六館館長として双六の蒐集・研究・制作に取組む。
公式サイト=<http://www.sugoroku.net/index.html>



明治23年制作。
印刷発行 日本橋 石倉八重。
サイズは縦63cm×横74cm。
所蔵 吉田 修 写真・複製 他

この年は、教育勅語が發布され、第一回帝国通商議事が召集されました。また、帝国ホテルが創業され、小泉八雲が来日し、第一回回覧メーデーが開催されました。

一三枚の舞扇に歌舞伎の役柄と決め台詞が華麗に描かれています。全国の名勝地の扇もありです。

赤を基調とした初春に相応しい色使いの双六です。中央下にある振出しで「一」が出たら右上の扇品川の海蔵寺に進みます。このお寺は江戸時代の紅葉狩りの名所です。二三枚出たら中央右寄りの扇助六へ飛びます。紫の袷巻に色気が漂う助六が右手の傘を広げると、舞台の遊女たちが「ヤンヤ、ヤンヤ」と湧き立つ様子が目に浮かびます。当代の市川團十郎でしょうか。曾我五郎、景清等の歌舞伎の主人公のみならず、河井継之助の馴染みであった熊本小籠や金瓶大黒の盛業など吉原の伝説の住処や娘様も登場しています。

1

JANUARY

2018

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	1 元日	2	3	4	5	6
7	8 成人の日	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			